



Title	『今とりかへばや』の恋する帝をめぐる一考察
Author(s)	片山, ふゆき
Citation	国語国文研究, 139, 18-31
Issue Date	2011-03-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93223
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_139-18-31.pdf



『今とりかへばや』の恋する帝をめぐる一考察

片 山 ふ ゆ き

一、はじめに

『今とりかへばや』を読み解く上で、最も留意しなければならない点の一つは、『源氏物語』やそれに続く『夜の寝覚』といった先行作品の強い影響力であろう。『源氏』以降の作品には、先行作品からの随所に見られる摂取は不可避であるといえる。『今とりかへばや』もその例にもれず、先行作品のモチーフや場面の摂取が深淺様々な形で認められる。しかし、ここで注意すべきは、この物語の場合それが多く、「男」と「女」の入れ替えを大いに生かしたパロディの形でもって現われるということだ。つまり先行物語が、中でも「男」と「女」による互いの心の行方を追及した恋物語を描くにあたり、繰り返し用いてきた様々な手法を取り入れ、そこに構築されてきた恋の世界を喚起させながらも、根本たる「男」と「女」という前提を覆すことで、『今とりかへばや』は呼び込んだはずの恋の世界をことごとく

とく茶化し、恋物語のパロディ化を行っていく。⁽²⁾ こうした摂取のあり方は、場面設定に限らず個々の表現など細部にまでわたり、『今とりかへばや』という物語を築き上げている。⁽³⁾

こうした視点で、物語が終結に向かう巻四に至って初めて開始する帝と女君の物語を見たとき、そこには、見過ごすことの出来ないある問題が浮かび上がってくるのだ。そしてそれは、先行物語がたびたび描いてきた、恋する「男」としての「帝」が関わる「男」と「女」の物語に対しての、『今とりかへばや』の姿勢を露わにするものと考えられる。しかも、この問題は、『今とりかへばや』が女君の結末として選び取ったものをも同時に解明するのではなからうか。本稿では、物語終末部における帝と女君の物語に焦点を絞り、『夜の寝覚』などの先行作品と比較検証しつつこの問題を検討したい。⁽⁴⁾

二、『今とりかへばや』における帝

——問題の所在——

今大将と入れ替わった女君は、巻四において今尚侍として宮中に上るが、そこから新たに始まるのが、帝と尚侍の物語である。彼女が出仕するとにわかに帝は物語の前面に躍り出る。要略すれば、彼は今尚侍を思ふあまり、垣間見、闖入といった行動を起こし、そしてその帝の行動を契機として女君は帝寵を我が物とし、国母となつてついに中宮にまで上り詰め、物語は大団円を迎えるのである。この帝はつまり、

いとかしく国母の位にきはめたまふべき相おはせし人なり

(巻三 三五九頁)

といった巻一および巻三にある吉野の宮の、女君に対する予言を實現するという役割のみを担った人物だといふことができる。

また一方でこの帝は、「女」を獲得せんと自ら接近し行動する点において、『夜の寢覚』の流れを汲む「帝」として位置付けられてもいる。辛島正雄氏は、

『夜の寢覚』において、女主人公に異様な執着をもつて接近を図る帝が登場してからというもの、物語史上、帝の「ただ人」的行動のパターンが、目立つてくるようである。『今とりかへばや』にもまた、そのような一傾向が見えていゝといつてよい。

と述べる。加えて小田切文洋氏は、この帝を「中将と関わらせて登場させた」ところに、「忍び音型の様相もみせて、後半の三者間の悲

喜こともごもを彩る筋立て」のための「工夫」があるとする。⁽¹⁾

かくのごとき先行研究の指摘する通り、『今とりかへばや』の帝の、「女」に自ら接近するという「ただ人」の「男」を思わせる行動、ひいては女君・帝・臣下の「男」である宰相中将というこの三者の関係性は、『夜の寢覚』での寢覚上・帝・臣下の男君の關係に通じるものがあり、やはりその影響は看過できないものといえよう。

換言すれば、この『今とりかへばや』の帝は、先行物語に見られ、『夜の寢覚』で極まったともいえる、恋する「男」としての「帝」の様相を帯びている。けれども、物語における「帝」に注目すると、『今とりかへばや』の帝には、先行物語の帝達の系譜にそのまま結びつけることは出来ない、ある差異を彼らとの間に見出すことになる。そしてその差異とは、『今とりかへばや』の帝の場合、その描写が極端に限定されているということである。

春宮は二十七八にて、御容貌などもただ王氣づきて氣高くおはしますが、
(巻一 一七八頁)

右は、帝の話題が物語内において初めて登場する場面である。この春宮こそが後の帝であるが、彼はここで傍線部のように描写されている。「王氣づく」とはつまり、

女御の御宮たち、はた、父帝の御方さまに、王氣づきて氣高くこそおはしませ、ことにすぐれてめでたうしもおはせず。この君、いとあてなるに添へて愛敬づき、

(『源氏物語』 柏木 ④三三三頁)

よき人どちは、よしなきだに似るものなれば、まいて同じ御ゆかりなればにこそは。されど、これは今より様ことに、王氣ぞ

つかせたまへる御気色にぞ

『狭衣物語』巻二 ④一八三〜一八四頁

などの例からも明らかのように、王統を継ぐにふさわしいさまを表すと同時に、『源氏物語』例中の、波線部における「この君」にあたる薫と「御宮たち」との対比の表現からわかる通り、容姿の美しさなどといった美質とは次元の異なるものであると考えられよう。ゆえにこの帝は、まずその登場と共に、王統を継ぐにふさわしいさまを有することばかりが強調され、描写されているといえる。さらに後で詳しく見るように、『今とりかへばや』では帝の姿の描写はこの箇所ではかなされておらず、その後の登場場面においてはまるで見出せないのである。もちろん、「王氣づく」の語から、読み手側は素晴らしい帝像を想像することはできる。だが、ここで重要なのは、あくまで『今とりかへばや』の語り、および帝に相對する「女」や周囲の人々が、帝のさまをこの箇所以外に語ろうとしないということである。なぜならそれは、帝が恋し、自ら動く存在であることに鑑みると、非常に不自然なことであるからだ。恋し行動する帝の、先行物語の「帝」との類似性と差異こそ他ならぬ問題の所在となる。

三、先行物語における帝

では、帝に関する描写の無さを詳しく確認していく前に、まず、恋する「帝」として際立った存在、「ただ人」のごとく行動する「帝」という点で、その影響が指摘される『夜の寝覚』の帝のありさまを見ていき、この物語内においては帝の描写はどのようになされ、ま

たそれぞれの描写はどういった機能を果たすのかをあわせて検討していく。

泣く泣くのたまはする御気色の、あはれげになまめかせたまへることは、いと気高く、もの深けれど、つゆのことわりも知られず、過ぎにし御影もいとほしく、いとかくあはつけくて、かばかりも御覽ぜらるる、いと世に例ない心地するに、(略)なべての世の人聞きなどまでもただ今はおぼえず、内大臣に、「あな、思はず」と、うち聞きつけられたらむ恥づかしさ、苦しさに、

(巻三 二七九〜二八〇頁)

右は、寝覚上に焦がれる帝が彼女のもとに闖入し、長時間にわたって言い寄るくだり。ここには波線部に見られる通り帝の魅力的なさまが語られている。ここでの帝は、「帝」であると同時に、物語内部において美質を備えた一人の恋する「男」として描写されるのだ。さらに波線部に注目したい。傍線部のような素晴らしさを併せ持つ帝に言い寄られた寝覚上は、男君への自らの恋心を自覚する。言い換えれば、ここにおける帝の魅力の描写は、それを退ける寝覚上の心強さと、男君に寄せる思いの強さを強調する役割を担っているのである。翻って考えてみるに、寝覚上にとって帝は、自らに言い寄る一人の「男」として意識されているといえよう。

さばかり気高く、あてに、心深くなまめかせたまへる御有様見たてまつりて、人には殊に、げにさもや、うち思ひ、靡きたてまつりぬらむ

(巻三 二九八頁)

上の、いといったうおぼし入り、うちながめさせたまふ御かたち、有様の、にほひやかになどこそえおはしまさね、気高くなまめ

かせたまひて、艶にをかしうおはしますを、まいて、さばかり
いみじき言の葉尽くさせたまひつらむを、さりとて見たてまつ
りつらむかし。

(巻三 三〇五頁)

女にて、いとかかる御気色の、いかでか見知られ、あはれなら
ぬやうはあらむ。御かたち、けはひ、いと氣高うなまめき、心
深う優におはします。御文の書きさま、まことは、かばかり見
どころ限りなう、かたじけなき言の葉尽くさせたまへる。

(巻四 三五五頁)

つづいて、男君との関連についての帝の描写。これらは、帝闖入
事件を踏まえて帝と寝覚上との関係を危ぶみ、嫉妬した男君の心中
思惟にあたる。ここにも帝の魅力的なさまは傍線部のように語られ
ている。そうして、その素晴らしい帝に口説かれれば、寝覚上も靡
いてしまうだろうと彼は心配するのである。つまり帝は、男君によつ
ても恋する「男」として「女」に相對するものと意識され、男君と
並ぶ存在となつていると考えられよう。

また、帝の魅力は母である大皇の宮も認めるものである。

上の御有様を見ぬかぎりこそあれ、かばかり、限りなうなまめ
かしく、艶にいみじくおはしますを、見たてまつりだにそめて
は、え心強からじ。かならず思ひ靡きたてまつりて、かの大皇
の方さまは、思ひ退く心つきなむ

(巻三 二六七頁)

ここにもやはり、魅力的な帝の求愛にあつては「女」は靡くに違
ないという、先ほどの男君と同種の思考が働いている。

以上、『夜の寝覚』の帝の描写に関して見てきた。恋する「男」で
ある『夜の寝覚』の帝は、自ら物語を突き動かし、寝覚上と関わつ

ていく存在といえるが、永井和子氏は、『夜の寝覚』における帝を、
「苦悩が執拗に問い続けられるという形で具体的に主題と関わり」、
「むしろ人間として描かれ」、「その意味に於いて帝は男性主人公に比
肩する存在なのであり、そこではじめて中の君と等質に向きあい、
関わりあつていく」人物とする。⁽⁸⁾つまりは、男君の嫉妬および寝覚
上とのくだりにおける帝の魅力に関する記述は、帝が男君と並ぶ
「男」として寝覚上に相對する存在であつて、帝と寝覚上との関係も、
男君と寝覚上のそれと同じく「男」と「女」であることを示してい
るといえよう。恋し行動する帝は、「帝」であると同時に、一人の「男」
として語られるとともに登場人物達にも意識され、そしてその上で、
「男」と「女」互いの恋心の行方が問題とされていくのである。

それでは次に他作品に目を向けてみれば、なにも『夜の寝覚』の
ような活躍を見せなくとも、先行物語には恋する「帝」は登場し、
しかも、一人の「男」としての彼らの描写は表されてきたことがわ
かる。その姿、心⁽⁹⁾ばえ、才能などを人々から様々に批評される物語
の登場人物たる帝達。つまり帝は、「帝」であると同時に、物語内部
においては人から見つめられ、批評される一人の「男」であつたわ
けだ。

とりわけ、「男」「女」の関係の下に「帝」に相對する「女」達に
注目したい。彼女らは、帝と臣下の「男」を並立させ、二人の「男」
を比較し、評していく。例えば『源氏物語』では、臘月夜の尚侍が
朱雀帝と光源氏を比較する「女」となる。

よるづに恨みかつはあはれに契らせたまふ、御さま容貌もいと
なまめかしうきよならねど、思ひ出づることのみ多かる心の中

ぞかたじけなき。

(須磨 ②一九七頁)

御容貌などなまめかしうきよらにて、限りなき御心ざしの年月にそふやうにもてなさせたまふに、めでたき人なれど、さしも思ひたまへらざりし気色心ばへなど、もの思ひ知られたまふまに、などてわが心の若くいはいけなきにまかせて、

(落標 ②二八一頁)

彼女は、帝と臣下の「男」を同じ組上に乗せ、天秤に掛けてゐる。帝も恋する「女」の前では、一人の恋する「男」となつてしまふのだ。その他にも「女」から見つめられる「帝」としては冷泉帝が挙げられる。彼もまた、玉簾によつて光源氏と比較される存在なのだ。さらに、時代を遡り『うつほ物語』を見ると、今度はあて宮が仲忠と東宮を比較する。彼らは『夜の寢覚』のような「ただ人」的な行動をとるわけではないが、しかしそれでもなお、恋する一人の「男」として意識される。翻つて『夜の寢覚』の帝は、こうした恋する「男」としての面を強調した存在と位置づけられよう。

「男」と「女」という関係のもとに「帝」に相對する彼女達は、『夜の寢覚』のごとく「帝」と臣下の「男」を二人の「男」として並立させ、自らの心の行方を問題にしていくな。換言すれば、そうした視点は、彼女たちが「男」に相對する「女」として自らを位置づけ、自覚していることを表すのである。先行物語における帝は、一人の「男」としても意識される存在であり、そしてその上で初めて「帝」と「女」と臣下の「男」による恋の物語は語られていくことになるのだ。

四、『今とりかへばや』における帝の描写

先行物語における帝の描写に關して確認してきたところで、改めて『今とりかへばや』に戻ろう。『今とりかへばや』において帝は、自ら意中の「女」に接近する点で恋する一人の「男」として描かれているようでありながら、前述の通り、帝らしさを表すものの以外の、容姿、心ばえ、才能といったものが具體的には全く語られない。これは既に見てきた通り、極めて特異なことなのである。

まず、女君と相對した場面。先ほどの『夜の寢覚』では「女」に相對する「男」としての帝の姿描写が見られたが、『今とりかへばや』においては、帝が『夜の寢覚』のごとく恋する「男」として自ら行動するにも拘らず、「女」に向き合い、見つめられるはずの「男」としての描写を一切見出すことは出来ない。女君に相對しているはずの帝は一人の「男」としての姿は描写されず、一方、相對する「女」であるはずの女君は、帝を誰かと比較するどころか彼自身への感想さえも語らないのだ。中でも次の場面に着目したい。

しひて引きやりつつ、年ごろ思ひし心のうち、大臣のあながちに辭びし恨めしき、春宮の御惱みの折ほのかに見そめてことなど泣く泣く言ひ続けさせたまふに、あさましうなりて、あらぬ人なりけり、中納言と思ひしは一筋に心憂くねたかりしを、これは、わが身の憂さも御覽しあらはされなば、いかなることぞと思しとがめられたてまつり、あはあはしかりける身の有様を御覽しあらはしては、あなづらはしき方さへ添へて、行くて

に思しめし捨てられなむことも、心憂く恥づかしうて、

(巻四 四四九〜四五〇頁)

泣く泣く後の世まで契り頼めさせたまふに、さすがにあやしと思しめし咎めさせたまふにやとおぼゆる御気色の、色にこそ出だしたまはねどいとしるきに、せん方なく恥づかしう、汗も涙もひとつに流れ添ふ心地して、人のあやしと咎めんもさすがに苦しう思さるれば、出でたまはんととも、あさからず契り語らはせたまふさま、まねびやらん方なし。

「三瀬川後の逢瀬は知らねども来ん世をかねて契りつるかな」

この世ひとつの契りはなほあさき心地するを、いかげあらんと思ふなん口惜しき」とのたまはするまに、ほろほろと続きぬる涙に、いとど聞こえ出でん言の葉もおほえず、いみじうつましけれど、「なほ一言聞かでは、えなん出づまじき」とやすらはせたまふも、いとわりなければ、

行く末の逢瀬も知らずこの世にて憂かりける身の契りと思へば

朝夕聞き馴れさせたまへりし声けはひは、思しめしあやめらるることやとつましうて、いたく絶え絶えまきはしたまへるけはひの、愛敬つき、聞かまほしきことぞ限りなき。片時たち離れさせたまふべき心地もせねど、御身を分かちとむる心地して、かへすがへす契りおきて、昨夜の妻戸より出でさせたまふ。

(巻四 四五二〜四五三頁)

これは、ついに帝が女君をかき口説くくだりであり、『夜の寝覚』

における帝闖入時の寝覚上と類似した状況にある場面である。けれども女君には、寝覚上に見られたような心理は働かない。彼女に見られるのは、ただ波線部にあるような過去の秘密の露見に対する恐ればかり。こうした秘密露見への恐れを表す心中思惟はその後も繰り返され、中宮となった後にも次のように語られている。

うちほほ笑ませたまふ御気色、もしわがおりつる気色をあやしと御覧じけるにやと心得らるるぞ、わびしかりける。

(巻四 五一六頁)

ちなみに帝の視線による女君の魅力は、「御顔いと赤くなりてうちそむきたまひぬるうつくしげさぞ、類なき」(巻四 五一七頁)といったように語られる。つまり女君には、寝覚上のような、帝を一人の「男」として捉え、そしてその上で「男」に対する「女」としての心を問う視点が欠けていると考えられよう。

無期に出でさせたまはぬを、宰相、わがやうに御覧じつけたらんととき、例なき様にても御横目あらじかしと思ひ寄るに、いつも御覧じつけてはかくのみ語らひなづさはせたまふと見しかど、日ごろは何とも思ひとどめられざりしを、うしろめたく胸のみつぶれて静心なし。

(巻二 二八一頁)

つづいて、女君をめぐるもう一人の「男」として帝と並ぶ可能性を持つ存在、宰相中将との関わりにおいて見ていく。右は、既に女君と関係を持った宰相中将の、帝に長きにわたり引き止められる女君への心配と、嫉妬の心が表わされている場面。とすれば、前掲の『夜の寝覚』の男君の嫉妬心と通じるものが該当のくだりにも見出せると考えられよう。しかし、実際のところ右の引用からわかる通り、

この宰相中将の心配事は、帝が女君の正体を見破れば「御横目あらじかし」ということに限定されている。彼は、女君が帝の寵愛を受け、手の届かぬ人となることにしか不安を感じてはいない。「女」が「男」としての帝に魅せられるのではないかといった「夜の寢覚」の男君のごとき懸念は、宰相中将には一切認められないのである。

最後に、第三者としてある今大将ならびに左大臣との場面に關して確認する。彼らは、女君への抑えられない愛情を心に、涙を浮かべつつ語る帝を見る存在だ。しかし、恋する帝を前に彼らが感じるのは、

同じ心ならずやと思ふこそ、かひなくと仰せらるるものから、
御涙の浮きぬるを、なほざりには思されぬことと見るも、今は
いとうれしくて、
(巻四 四四二頁)

限りなく思しめられたんめる御氣色も、かつがつ限りなくうれしく聞かれたまふ。思ひなく世の常のさまにて参りたまひて、
後の位にも居たまはんに飽かぬことあるまじき御身を、何となきさまにて御覽せられぬるぞ、いみじく口惜しき。

(巻四 四五八頁)
などに代表されるような寵愛への感動ばかりであり、やはり帝を一人の「男」として捉えることはしない。

かくのごとく『今とりかへばや』の帝を先行作品における帝達と対照すると、その差異は明確である。恋の文脈においては、「帝」であるとともに一人の「男」としても見つめられる先行作品の帝に対して、『今とりかへばや』の帝は、ひとえに「帝」である面だけが強調される。つまり彼は、当人の「ただ人」的行動によって『夜の寢

覚』の路線にのり、「男」の面を強調するようでありながら、実は、それ以前の物語の「帝」達よりも「帝」としてのみ意識されているのである。ここから浮かび上がるのは、『夜の寢覚』のように「女」に近づく帝の行動から想定される「男」と「女」の相互の心を問題にした恋物語と、『今とりかへばや』における帝と女君の物語との、歴然たる隔たりではないだろうか。

ちなみに『今とりかへばや』では、この帝以外にも、「王氣づく」と形容される人物が登場する。それは彼と女君の間に生まれた春宮である。

男宮生まれたまひぬ。(略)若宮の、いとうつくしげに大きに王氣づきておはしますを、ただ人知れぬ人の生まれたまへりしほどとおぼゆるに、いみじうあはれにて、御涙ぞほろほとこばれぬる。

ひたぶるに思ひ出でじと思ふ世に忘れ形見のなに残りけん
とぞ御心のうちに思しける。
(巻四 五〇〇〜五〇一頁)

傍線部のように春宮の描写には「うつくしげ」という表現が加わるものの、やはり「王氣づく」が強調されていることは注目し値する。女君は紛れもなく王統を継ぐにふさわしい人物を産んだということが、ここでは重要視されているのだ。さらにもう一点着目したいのは、産んだ本人である女君は帝の子を得た喜びはやはり語らず、宇治に残してきた我が子に思いを馳せているということである。しかも宇治の若君を思いはしても、一方で、その父親である宰相中将自身とのことは依然として「ひたぶるに思ひ出でじと思ふ世」という認識であって、この「男」との仲を復活させたいといった思いがあ

るわけではないことが、ここに打ち出されているといえよう。女君は一貫して、二人の「男」を自らの心より締め出している。彼女は物語の終末部において、かつての「男」宰相中将を拒否し、そして新たな「男」であるはずの帝に関しては語ることもさえないのだ。ここには、女君の「女」としての問題がある。

五、四の君という「女」

さて、こうした女君のあり方を考える上で、非常に重要となる人物が『今とるかへばや』には存在する。それは、物語終局に向けて女君と非常に類似した道のりを辿ったもう一人の「女」、四の君である。その類似性に関しては、辛島正雄氏によって既に詳細な指摘がなされているが、彼女は、女君とほぼ同時期に宰相中将から離れ、新たな「男」である今大将の子を身ごもって、身の安定を手に入れる。だが、そこにおける反応は女君と一々対照的といえるのだ。

さはいへど、御けはひ有様何ごともこよなき御さまにて、御心ざしめいと深くなりゆくに、かかる御心地の後はいとどあさからず思しためるさまも、この人の御心ざしに劣るべくもあらざめり。恥づかしう恐ろしながらも、はじめはあながちなりし気色にすこしは片寄りにしぞかし、今はた世の人の言ひ思ふらんこと、大臣の思されんうちうちの御有様といひ、方々なずらひなるべくも思されぬ、ことわりなりかし。(巻四 四七四頁)

これは、宰相中将に関する左衛門の報告を聞いての、四の君の心中を表したものだ、ここで彼女は、かつての恋人宰相中将と現在の

夫今大将を比べ、今大将への満足と周囲の状況から考えても今さら宰相中将に靡くはずもないことを語る。つまりここには、前の「男」と新たな「男」を比較するという、女君には見られない、むしろ先行作品の「女」達に通じる心情が表出されているのである。彼女は、恋の対象として「男」二人を同じ組上に乗せる、恋する「女」として存在している。換言すれば、女君にはこうした視点が欠如していることが、四の君の心中思惟との対照によって浮き彫りにされるのだ。類似した状況にある四の君との差異が、女君の特異性を明確化するといえよう。

そして、この物語内における四の君との類似と差異に注目したとき、看過出来ないものとなるのが「三瀬川」の場面の類似性である。帝と女君との関係が開始する前掲の「三瀬川」の場面は、巻一にある四の君と宰相中将との密通場面と類似、対応した関係にある。これを指摘したのは今井源衛氏であるが、氏の中でも「三瀬川」の歌における「男」の側の、契った「女」の処女性に関する意外感の対照性について言及している。

わがためにえに深ければ三瀬川後の逢瀬も誰かたづねん

(巻一 二〇八頁)

この宰相中将による「三瀬川」の歌は、「自分こそが三瀬川を背負って渡る」という感動を表しており、まさに帝の、

三瀬川後の逢瀬は知らねども来ん世をかねて契りつるかな

(巻四 四五二頁)

との、「別に三瀬川を背負って渡してくれる男がいる」とする歌とは対照的なものであって、今井氏の指摘する通り両場面は、類似の中

に「男」の意外感の対照性が際立つ関係にあるといえる。けれども一方で、ここには「女」の側にも対照的な反応が見出せるのだ。

いとどめづらかなりつる気色はふと思ひ出でられて胸ふたがりぬ。
(巻一 二〇九頁)

右のくだりに注目したい。これは、宰相中将との密通場面直後の四の君を襲った感情を表したものだ。この場面での四の君には事件への惑乱が見えるものの、押し入った「男」に対する嫌悪の念は少なく、かえって、その後「男」に靡く彼女を暗示すると考えられよう。これを女君の反応と比較するとその違いは明らかとなる。女君に見えるのは、秘密露見回避のための、すなわち保身からの行動およびそれゆえの「演技」なのだ。「男」自身に対する思いは語ることなく保身に努める女君は、恋に繋がる四の君とはまさに対照的といえるのではなからうか。換言すれば、「三瀬川」の両場面の対応は、「女」と「女」の対照性をも明確化させる構造となっているのである。つまり、二人の「女」は、類似し、接近することによってその差異が強調され、対比される関係となるのだ。

女君は、帝との恋の始まりであるはずの「三瀬川」の場面で、既に、恋する「女」である四の君とは対照的な像を築き上げていく。四の君という「女」が、女君と類似を見せつつも対置されることで、女君の「女」としての特異性がより一層浮き彫りとなるのである。

六、恋物語のパロディとして

先行作品という物語外部とだけではなく、『今とりかへばや』の物

語内部においても差異を積み上げ、女君と帝の物語は語られていく。そこから浮上するのは、先行物語の「女」達、および四の君に見られたような「男」と「女」の相互の恋心を問題とした物語が介在せずに、あくまでも「帝」としてある帝からの絶大な寵愛と、王統を継ぐにふさわしい皇子の誕生によって、現世での栄達を手にした女君の結末である。そしてここに、女君への予言は見事実現されるのだ。つまり、吉野宮による「国母」という既に具体的な形でもって表明された予言は、結局その地位以外は問題にすることなく実現したわけである。これは、先行作品において予言が担ってきた役割を考えれば、かえって不自然なことといえるのではなからうか。

『源氏物語』などの先行物語に繰り返し用いられてきた予言とは、それがいかに実現するかに重きが置かれていると考えられる。ゆえに、予言というモチーフが出現した時点で、読み手の興味もまた、その予言の実現のされ方にあつたといえよう。その点に鑑みれば、『今とりかへばや』の上記の予言からも、先行作品に見られたような「男」としての帝と「女」の物語が想定された可能性もあるのではないだろうか。事実、帝の「ただ人」的な行動はそれを十分に意識させるといえる。予言の実現のため女君の相手として登場した帝は、先行物語に描かれてきた「帝」の恋というモチーフをも呼び込んだのである。けれども『今とりかへばや』は、帝をあくまで「帝」とし、そこに「男」と「女」の機微は差し挟まず、その地位ばかりに焦点を絞って予言を実現させることにより、先行作品の影響下におけるそれらの想定をことごとく覆していく。呼び込まれた「帝」の恋のモチーフは、かえって、帝を一人の「男」として捉えつつ自らを

恋物語中の「女」として位置づける先行物語の「女」達と、そのような視点を持たない『今とるかへばや』の女君との対比を促すことになるのである。さらに『今とるかへばや』内部においても、同時に終結を迎える四の君の結末が女君と類似することによって、二人は接近し、対比される。こうして、女君の特異性は一層浮き彫りとなるといえよう。

先行物語には数々、「女」と臣下の「男」、そして「帝」という位にある「男」の三角関係における心の所在を問う物語が見られる。

『今とるかへばや』もまた一見、女君と宰相中将、そして帝という三者の関係から、そうした物語を紡ぎ出そうとしているかのようであるが、しかし結局は、帝との関係は「帝」との関係でしかなく、また宰相中将に関しては徹底的に拒否する女君の心を描くことで、そうした物語から離反してみせる。『夜の寝覚』のごとき帝の「ただ人」的な行動から想定された世界を『今とるかへばや』は打ち崩すのである。となればここには、『夜の寝覚』をはじめとする先行物語における「男」と「女」の恋を前提とした三角関係の、パロディともいべき三者の関係が見出せるのではなからうか。右を考える上で、物語終末部に語られる帝の誤解は示唆的である。

大臣の知りながら許さずなりにけるも、いかばかりあさはかなる人にかとなま心劣りしつるを、これはしも、帝と聞こゆとも、少々かたはならんは何にかはせん、人柄、容貌、有様をはじめていとめづらかなめる人なれば、さまで思ひ寄るまじきほどの御仲らひにはあらざりけんを、せめて上なく思ひ驕りけん心ざしの違はん本意なき、また、人柄のせめてあだに頼みがたく、

右の大臣わたりになどめづらしげなきやうならんなどを深く思ひ憚りて、許さずなりにけるならんかし、いかに男も女もかたみに心のうちもの思はしからんと、いとほしく推し量られさせたまふ。
(巻四 五一―五頁)

これは物語の終盤、宇治の若君と女君の秘かな再会を影からこっそりと見守る帝が、女君のかつての「男」は宰相中将かと見抜き、その上で抱いた感懐である。ここで帝は、宰相中将を「男」として評価した上で、左大臣によって二人は仲を引き裂かれたに違いないと推察し、そして傍線部のごとく相思相愛の「男」と「女」を想像して同情する。この、帝が思い描いた「男」と「女」の関係こそ、先行作品に見られた三角関係の世界なのだ。その世界を「男」の面を問題とされない帝こそが意識し、しかも、その推測は結局的外れな誤解で、「男」と「女」は決して仲を引き裂かれた恋人同士ではない。そこに、『今とるかへばや』の皮肉が垣間見られるのではないだろうか。

かくて『今とるかへばや』の帝と女君の物語と、先行物語における帝と「女」の恋物語が対比的に浮かび上がる。『今とるかへばや』の帝の「勘違い」は、その対比を強調する機能を果たすのだ。自らに先行の恋物語を当てはめる帝の姿は、皮肉的であり、滑稽ともいえよう。まさに先行物語における三角関係の世界を逆手に取り、そこからのずれを明確にすることによって、「男」と「女」を排した自らの世界を浮き彫りにしている。このずれこそが、この物語のパロディ化の形なのである。さらにいえば、このパロディ化こそが、先行物語の恋物語に対する『今とるかへばや』の姿勢と考えられよう。

先行物語が描いてきた恋する「男」としての帝と「女」の恋物語が、枠として明示されることによって、恋物語から離反した『今とりかへばや』の姿勢を強調するのである。

以上、帝の描写に注目して『今とりかへばや』における帝と女君の物語を見てきた。「ただ人」的に「女」に近づく帝から思い起こされる先行物語に見られた世界を、『今とりかへばや』は、「帝」であると同時に一人の「男」として描かれた先行の帝達に対し、帝をあくまで「帝」として描くことによって覆し、そこから離脱していく。帝の、一人の「男」としてあるかのような破格ともいえる恋心は、結局、女君の前にあつては現世での身の栄達という結末を得るための手段でしかない。ここには、先行物語に用いられてきた「男」と「女」の恋物語の枠を利用し、そこで描かれた世界を喚起させた上で、その世界を逆手に取つてそれとの差異を表面化させ、むしろ「男」と「女」の恋を排した世界を構築するという『今とりかへばや』の姿勢が見出せるのだ。そうして『今とりかへばや』は、「男」と「女」の恋物語、果ては帝の恋物語をも無化していくのである。

七、おわりに

——「帝」の問題——

最後に、「帝」の問題に関して触れておきたい。立石和弘氏はこの栄達に言及して、『とりかへばや』が幻想する性的な理想秩序が、天皇を中心化するものであることがあからさまに示されてくる」と述べる。帝が「帝」たることを強調した物語のありようとそこから

の大団円を考えると、『今とりかへばや』が「国母」の位とそれによる繁栄を、現世における女君の栄達と捉えていることは間違いないだろう。さらに『今とりかへばや』の帝は、「王氣づく」と形容され、帝らしきの描写以外が省かれることによって、その地位が特化され、権威付けられているようにも見える。

けれども、栄達とともに行われる帝の恋の無化は、この帝の権威の問題を考える上でも見過ごしてはならない。つまり、『今とりかへばや』では、実はその地位こそが結末としての栄達的手段に利用されることによって、かえって形骸化されてしまっているのだ。先行物語における「帝」の恋のモチーフは、帝の「王」としての力、すなわち「王権」と、一人の「男」としての面との絡み合いの問題こそが重要であった。⁽¹⁸⁾『今とりかへばや』の帝の恋はそれらとは隔たりを持つていよう。先行物語に見られるテーマに反し、その恋が帝の地位のみに集約された上で利用されることにより、かえって「帝」自体の形骸化が露呈するのだ。したがって、『今とりかへばや』では、帝の恋が利用され無化されることによって、結果的に「帝」の相対化に繋がる結果をもたらすのである。

『今とりかへばや』は、先行物語が描き、追求してきた「男」と「女」の恋物語を、男女の入れ替えというモチーフを基として、もどき、無化させていく。そこでは、帝の恋も徹底的に無化されることとなった。恋する一人の「男」を思わせる、帝の行動から呼び起こされた「帝」の恋のモチーフは、「男」と「女」の恋の追求が排除され、女君の身の安定を手に入れるためのものとして位置づけられ、利用されている。その結果、利用される「帝」という構図が浮き彫りとな

り、形骸化された「帝」像が浮上してくるのである。

右の意味において、『今とりかへばや』における「王権」を、先行物語に見られたものと同じには考えられない。この物語の「王権」は、あくまで「男」「女」の恋における心の追求に対立する、最大の身の安定をもたらすものとのみ位置づけられている。このような結末は、先行物語や『今とりかへばや』の右大臣によって語られた、女は后になっても何にかはせん。この人に用ゐられたらんのみこそめでたかるべきことなれ。

(巻一 二一九頁)

などのとき、「王権」との二項対立のもとに「男」「女」の恋における心を追求する論を裏返し、帝寵を得さえすれば、ともかくも現世における身の安定は確実といわんばかりである。「男」と「女」の関係の中で苦悩し、「女」の「幸福」を追求する物語の「パロディ」が行き着く先は、「男」「女」の心の追求に対立する後の位、すなわち「王権」のもとの栄光であったのだ。

したがって、『今とりかへばや』の女君の結末は、同時に、後代物語に頻出する「女」の栄華の物語に通じる一方で、ただちに同じとすることはできないだろう。なぜなら、この物語における女君の栄達は、あくまで先行の「男」と「女」の恋物語の「パロディ」の結果と考えられるからである。

【注】

(1) ここでは、恋の場面において相対する者同士を示す、「男」「女」という呼称を用いている。

(2)

神田龍身氏は、「物語はその唯一絶対ともいえる性差の記号性を摘発しようとしているのである。それは当然、男女の恋物語としてしかあり得ないこれまでの全王朝物語のパロディ、そしてその否定ともなるわけである」と述べる。『物語文学と分身(ドッベルゲンガー)——『木幡の時雨』から「とりかへばや」へ』(『方法としての境界』新曜社 一九九一年)／「分身、交換の論理——『木幡の時雨』ととりかへばや——」『物語文学、その解体——『源氏物語』『宇治十帖』以降』有精堂 一九九二年 所収)

(3)

このような引用論は、辛島正雄氏、西本寮子氏の研究をはじめ、既に様々示唆に富む論が展開されている。

(4)

引用本文には、『国文学研究資料館蔵初雁文庫本』を底本とする『新編日本古典文学全集』(石埜敬子 小学館 二〇〇二年)を使用。その他、『うつほ物語』は、『うつほ物語 全 改訂版』(室城秀之 おうふう 二〇〇一年)、『源氏物語』は、『新編日本古典文学全集』(阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男 小学館 一九九四—一九九八年)、『夜の寝覚』は、『新編日本古典文学全集』(鈴木一雄 小学館 一九九六年)、『浜松中納言物語』は、『新編日本古典文学全集』(池田利夫 小学館 二〇〇一年)、『狭衣物語』は、『新潮日本古典集成』(鈴木一雄 新潮社 一九八五年)を用いた。なお、ルビに関しては省略した。傍線等は筆者による。

(5)

まず、大槻修氏は、巻四における帝闖入場面に関して、『夜の寝覚』における帝闖入事件の際の、寝覚の上の惑乱場面を

想起させる」と述べ(『平安後期物語選』和泉書院 一九八三年)、森下純昭氏は、「他の物語には珍しい『帝』の垣間見の場面を設定していること、あるいは帝の闖入事件など、主題展開のみならず構想の種々面においても類似するところが多々あるのである」と、『夜の寝覚』の影響を指摘した(「とりかへばや」の主人公と主題——作中歌・引歌と『夜の寝覚』との関係から——)(『岐阜大学国語国文学』一八 一九八七年三月)。

- (6) 辛島正雄「今とりかへばや」序説——古本からの飛翔——
『徳島大学教養部紀要』二三 一九八八年三月／『中世王朝物語史論』上 笠間書院 二〇〇一年 所収

- (7) 小田切文洋「今とりかへばや」の構図」(『語文』七九 一九九一年三月)

- (8) 永井和子「寝覚物語の帝——中の君の主人公性との関わり——」(学習院女子短期大学『国語国文論集』一八 一九八九年／『寝覚物語の研究』続 笠間書院 一九九〇年 所収)

- (9) 『源氏物語』以降の物語には、「この御門、御かたち、心なまめきて」(『浜松中納言物語』巻一 八一頁)、「帝は、ただ国王とて、あざやかにそばそばしうもおはしまさず、さばかりなまめかしう恥づかしげなる御有様に」(『狭衣物語』巻三 ① 三六頁)のごとく、帝の姿や心ばえ、才能に関する評の例は散見する。また時代を遡って『うつほ物語』にも、「楼の上・下」にて、在位時のものではないものの、嵯峨院、朱雀院がそれぞれ「らうらうじく、愛敬づかせ給へり」(九二七頁)、

「気近くなつかしくて」(九二八頁)などと評される。その他、後の今上帝にあたる東宮も、あて宮、仲忠、兼雅などによつて、才能、心ばえ等が評されている。

- (10) あて宮は、東宮の筆跡を仲忠のそれに比べて、「さし比べて見るに、まさりには、えぞあるまじき」(国譲・上 六六七頁)と述べている。

- (11) 辛島正雄「今とりかへばや」の女中納言と四の君とをめぐる断章——《女の物語》の思想、あるいはレイプの政治学——(『古典研究(古典研究同人)』一 一九九二年二月／《女の物語》としての『今とりかへばや』)『中世王朝物語史論』上 笠間書院 二〇〇一年 所収

- (12) 今井源衛「堤中納言物語・とりかへばや物語」(鑑賞日本古典文学12 角川書店 一九七六年)

- (13) 「めづらか」は非常識で失礼なの意であるが、その中に意外な感情が動いたことをも暗示している。宰相の暴行を受けながら、嫌悪の念の薄い受けとめ方である(『新日本古典文学大系』今井源衛 森下純昭 辛島正雄 岩波書店 一九九七年)

- (14) 女君の「演技」に関しては、菊地仁「『とりかへばや物語』試論——異装・視線・演技——」(『日本文芸思潮論』桜楓社 一九九一年、西本寮子「演じ続ける女君——『今とりかへばや』における罪の問題——」(『物語(女と男)』有精堂 一九九五年)に詳しい。

- (15) 女君と四の君は、しばしば類似を見せつつ、対照的なさまが

描かれる。それは二人の「女」の差異を明確化させ、特異な女君像を構築する構造となるのである。(拙稿「とりかへばや物語試論——女主人公と四の君、二人の「女」の接近と対比——」)

(16)

『古代中世文学論考』一九 新典社 二〇〇七年) 王朝物語に見られる予言を、室城秀之氏は「物語が予言の教えるままに展開されるのではなく、物語が、予言を抱え込んで、物語の世界を自ら作り出す」と定義づける(『王朝物語必携』学燈社 一九八八年)。予言とは、それが投げかけられることによって、物語内において登場人物の内面に働きかけ物語を展開させるとともに、読み手には「謎かけ」(高橋亨「源氏物語の方法——謎かけの文芸」(『新講 源氏物語を学ぶ人のために』世界思想社 一九九五年)「謎かけの文芸としての源氏物語」『源氏物語の詩学 かな物語の生成と心的遠近法』名古屋大学出版会 二〇〇七年 所収)としての機能を果たすものとして位置づけられよう。

(17)

立石和弘「『とりかへばや』の性愛と性自認——セクシュアリティの物語」(『女と男のことばと文学』森話社 一九九九年)

(18)

例えば、『源氏物語』桐壺帝の恋には、「聖別された存在」である「帝のタブーとの格闘」(益田勝実「日知りの裔の物語——『源氏物語』の発端の構造——」『火山列島の思想』筑摩書房 一九六八年)があり、また、さらに遡った『竹取物語』のかぐや姫と帝に関しても、小嶋菜温子氏は、「帝が皇権を発動すれば、かぐや姫もその神権を行使する。いいかえれば、

制度性が後退した時のみ、ふたりは個としての関係を結びうるはずだ」(『かぐや姫幻想——皇権と禁忌』森話社 一九九五年)と述べる。

(19)

「めでたの人の御様や。我、女にて、かばかりうちおぼえ、ながめたらむを見ては、いみじからむ後の位をも捨てて、靡き寄りなむかし」

『夜の寝覚』巻一 一〇九頁) あるじの中納言の御かたちありさま、あてにけだかう、愛敬こぼるばかりあたりまでにほふ心地して、おり立ち、いみじう心に入れて、経・仏の飾り、世のつねなるまじうおぼしいとなみたるさま、いみじからむ後の位も何にかはせむ。

(『浜松中納言物語』巻三 二五八頁)

《付記》 本稿は、平成二十一年度中世文学会秋季大会(於藤女子大学)における口頭発表をもとに、まとめたものである。発表に際してご教示を賜りました先生方に、心より御礼申し上げます。

(かたやま ふゆき・北海道大学大学院博士後期課程)